

未来医療研究人材養成拠点形成事業
オール新潟による次世代医療人の養成プログラム

トータルヘルスケア ワークショップとフィールドワーク 報告書



2015. 8. 26～28

新潟大学医歯学総合病院次世代医療人育成センター

目次

開催概要と目標	2
タイムスケジュール	3
参加者名簿	4
1日目 ワークショップ	5
アイスブレイキング「心に残る学習」	
口腔ケアに関するミニレクチャー・実技	
口腔ケアを通して考える超高齢社会の課題（KJ法）	
フィールドワークの目標	
1日目のまとめ	
2日目 フィールドワーク	9
1班報告書 津川病院・東蒲の里	
2班報告書 デンタルクリニックツチヤ・エバーグリーン	
3班報告書 豊浦病院	
4班報告書 中条愛広苑・グループホームどっこん	
5班報告書 よねやまの里・柿崎第2デイサービスセンター	
3日目 ワークショップ	19
フィールドワーク体験共有	
参加者の感想	
アンケート	33

平成27年度
第1回「トータルヘルスケアワークショップとフィールドワーク」

開催概要

主催：新潟大学医歯学総合病院次世代医療人育成センター

協力者：新潟大学大学院医歯学総合研究科総合地域医療学講座

新潟大学医歯学総合病院医師キャリア支援センター・総合臨床研修センター

新潟医療福祉大学

新潟薬科大学

日時：平成27年8月26日（水）9:00～16:00

～

平成27年8月28日（金）9:00～12:00

会場：新潟大学 臨床技能教育センター（旭町総合研究棟4階）

ワークショップとフィールドワークの目標

●一般目標 G10：

「口腔ケア」を一つの切り口として、超高齢社会を支える保健・医療・福祉への理解を深め、「チーム医療」と「多職種連携」の意義を学習する。

●行動目標（SBOs）：

1. 口腔ケアにおけるチーム医療・多職種連携の意義を説明できる。
2. KJ法や二次元展開法を用い、発想できる。
3. 超高齢社会の問題点を説明できる。
4. カリキュラムとは何か、説明できる。
5. G10とSBOsとは何か、説明できる。
6. フィールドワーク・口腔ケアなど体験実習の目標を説明できる。
7. 超高齢社会の優先課題を説明できる。

タイムスケジュール

平成 27 年 8 月 26 日 (水)

8:45-9:00	受付
9:00-9:05	はじめに
9:05-9:10	集合写真撮影
9:10-9:15	オリエンテーション「ワークショップとは」
9:15-9:20	「心に残る学習（絵）」について
9:20-10:00	グループ討議 1「心に残る学習（絵）」
10:00-10:20	発表 1「心に残る学習（絵）」 (休憩)
10:25-10:45	ミニレクチャー1
10:45-11:10	実技講習
11:10-11:15	「口腔ケアを通して考える超高齢社会の課題」について
11:15-12:00	グループ討議 2「口腔ケアを通して考える超高齢社会の課題」 ----- (昼食)  -----
13:00-13:20	ミニレクチャー2
13:20-13:45	発表 2「口腔ケアを通して考える超高齢社会の課題」
13:45-14:15	ミニレクチャー3 (休憩)
14:25-14:35	「カリキュラムと目標」について
14:35-15:15	グループ討議 3「フィールドワークの目標」
15:15-15:40	発表 3「フィールドワークの目標」
15:40-16:05	1日目のまとめ・連絡

平成 27 年 8 月 27 日 (木)

8:30-17:00 各班ごとにフィールドワークへ

平成 27 年 8 月 28 日 (金)

8:45-9:00	受付
9:00-9:05	「フィールドワーク体験共有」について
9:05-9:45	グループ討議 4「フィールドワーク体験共有」
9:45-10:15	発表 4「フィールドワーク体験共有」 (休憩)
10:25-10:30	「WS/FWで学んだこと・感じたこと」について
10:30-11:10	個人ワーク「WS/FWで学んだこと・感じたこと」
11:10-11:50	ワークショップのまとめ・全員で一言感想 修了式



参加者名簿

学校・学部・学科	氏名	WS 班	FW 班
新潟大学 医学部保健学科 3 年	安孫子陽一	B	4
新潟薬科大学 薬学部薬学科 5 年	五十嵐李奈	B	3
新潟医療福祉大学 医療技術学部言語聴覚学科 2 年	大井菜未	C	1
新潟大学 歯学部口腔生命福祉学科 2 年	大野田美祈	A	4
新潟大学 医学部保健学科 2 年	笹川由香	A	1
新潟薬科大学 薬学部薬学科 5 年	佐々木有菜	C	4
新潟大学 歯学部口腔生命福祉学科 3 年	渋谷瞳	C	3
新潟薬科大学 薬学部薬学科 5 年	清水茉耶	A	5
新潟薬科大学 薬学部薬学科 5 年	白井柚乃	A	1
新潟医療福祉大学 医療技術学部言語聴覚学科 2 年	鷹橋鈴香	B	5
新潟大学 医学部保健学科 1 年	高橋尚子	C	5
川崎医科大学 医学部医学科 5 年	玉川大朗	A	3
新潟大学 医学部保健学科 2 年	土屋若菜	B	2
新潟大学 医学部保健学科 1 年	長濱愛香	C	3
新潟薬科大学 薬学部薬学科 5 年	野崎佑子	C	2
新潟医療福祉大学 医療技術学部言語聴覚学科 2 年	早川絵莉香	A	2
新潟大学 歯学部口腔生命福祉学科 3 年	村山未帆	B	1

1日目 ワークショップ

心に残る学習



ワークショップの初めは、「初めまして」の緊張をときほぐすためのアイスブレイキングを行いました。3つのグループに分かれ「これまでで一番心に残る学習」をテーマにして各自が模造紙に絵を描き、グループ内で自分の絵について説明をします。全体の発表では、代表者が全員の絵を1枚ずつ説明し、その後質問も受け付けます。個性的な絵の紹介で笑いも起こり、十分にアイスブレイキングになったと思われます。



口腔ケアに関するミニレクチャー



歯科医師から口腔内の構造（仕組・働き）について説明を聞いた後、歯科衛生士による口腔ケアの実演を見学しました。その後、口腔ケアグッズを用い学生同士で相互実習を行い、実際の口腔ケアを体験しました。

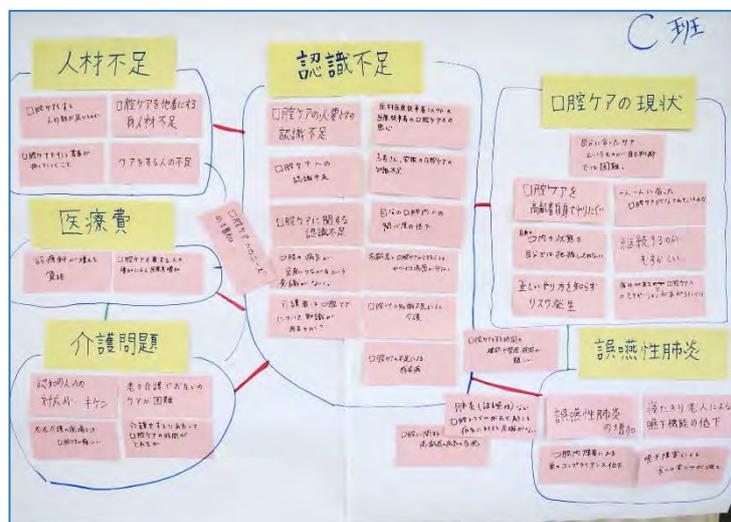
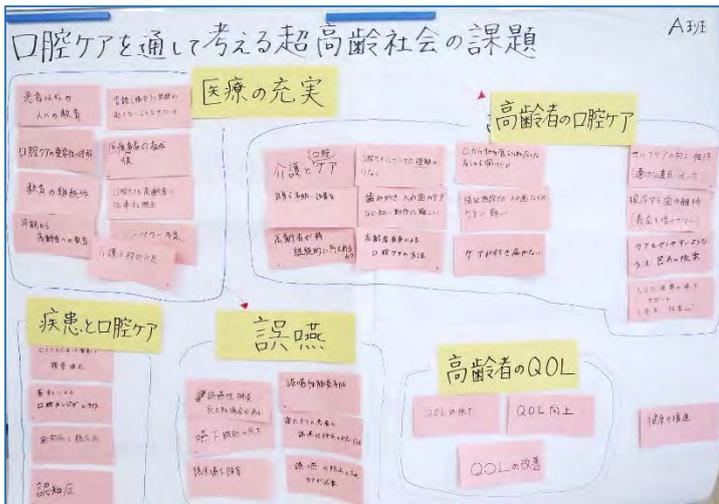
他に、「誤嚥性肺炎の予防」、「ソーシャルキャピタル」についてのレクチャーを受け、知識を深めることができました。





口腔ケアを通して考える超高齢社会の課題 (KJ法)

「口腔ケアを通して考える超高齢社会の課題」について、KJ法を用いて問題点の討議を行いました。各自が思いついたことや意見をカードに書き込み、関連するもの同士を集めてグループ化します。グループにタイトルをつけ、相互関係を考慮しながら配置し組み立てて図解していきます。この作業の中からテーマの解決に役立つヒントやひらめきを生み出すことが出来ます。「超高齢社会」の単語一つをとっても、そこから想起される事態は個々の学生によって異なり、その思いつきの中には大きな幅があるように思われます。また一方で、共通してみられる項目もあり、それらはより重要なものと考えられました。



フィールドワークの目標



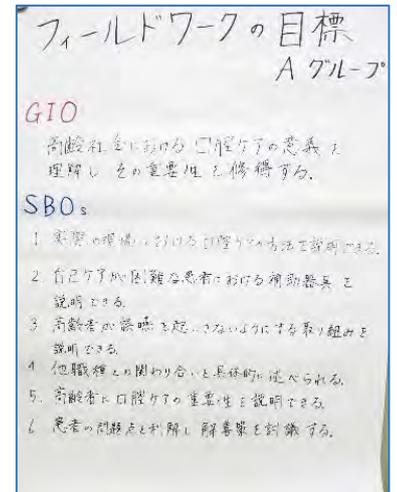
2日目のフィールドワークで学びたいこと、聞きたいこと、体験したいことなどを話し合い、一般目標（GIO）と行動目標（SBOs）としてまとめました。将来の医師・看護師・薬剤師・歯科衛生士・社会福祉士・言語聴覚士・理学療法士という多職種の立場からいろいろな意見がでました。各自がこの目標をもって明日のフィールドワークに臨みます。

A 班

GIO：高齢社会における口腔ケアの意義を理解し、その重要性を修得する

SBOs：

1. 実際の現場における口腔ケアの方法を説明できる
2. 自己ケアが困難な患者における補助器具を説明できる
3. 高齢者が誤嚥を起こさないようにする取り組みを説明できる
4. 他職種との関わり合いを具体的に述べられる
5. 高齢者に口腔ケアの重要性を説明できる
6. 患者の問題点を理解し改善策を討議する

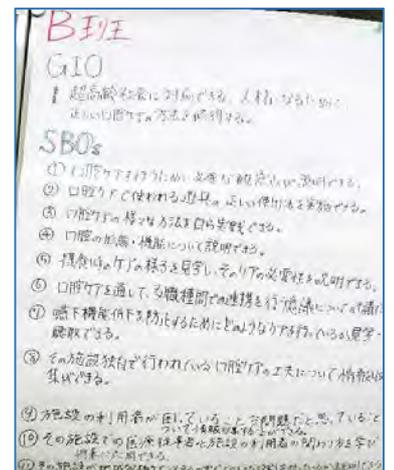


B 班

GIO：超高齢社会に対応できる人材になるために、正しい口腔ケアの方法を修得する

SBOs：

1. 口腔ケアを行うために必要な観察点が説明できる
2. 口腔ケアで使われる道具の正しい使用方法を実施できる
3. 口腔ケアの様々な方法を自ら実践できる
4. 口腔の形態・機能について説明できる
5. 摂食時のケアの様子を見学し、そのケアの必要性を説明できる
6. 口腔ケアを通して多職種間での連携を行う意義について討議できる
7. 嚥下機能低下を防止するためにどのようなケアをおこなっているか見学・聴取できる
8. 施設独自で行われている口腔ケアの工夫について情報収集ができる



9. 施設の利用者が困っていること、今問題だと思っていることをについて情報収集することができる
10. その施設での医療従事者と施設の利用者の関わり方を学び将来に応用できる
11. その施設が地域包括ケアシステムの中でどのような役割を担っているか説明できる

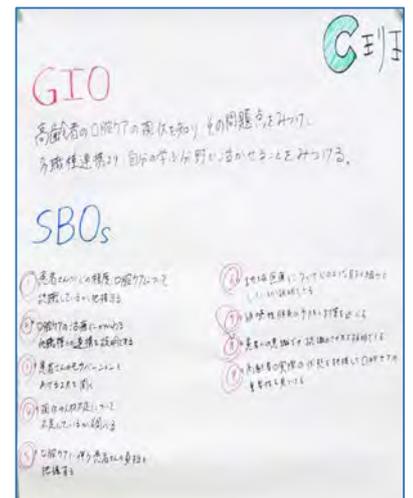


C 班

GIO : 高齢者の口腔ケアの現状を知り、その問題点をみつけ、多職種連携より自分の学ぶ分野で活かせることをみつける

SBOs :

1. 患者さんがどの程度口腔ケアについて認識しているか把握する
2. 口腔ケアの治療にかかわる他職種との連携を説明できる
3. 患者さんのモチベーションをあげる工夫を聞く
4. 現状の人材不足について不足しているか調べる
5. 口腔ケアに伴う患者さんの負担を把握する
6. 地域医療についてどのような取り組みをしているか説明できる
7. 誤嚥性肺炎の予防と対策を述べる
8. 患者さんへの意識づけ、認識のさせ方を説明できる
9. 高齢者の実際の状態を把握して口腔ケアの重要性を見つける



1 日目のまとめ

「心に残る学習」で描いた絵の中から、スタッフが選んだ優秀作品の表彰がありました。



それはライダーショー?で賞
大野田美祈さん



結構な山火事!で賞
高橋尚子さん



朝日がステキ♡で賞
土屋若菜さん

2 日目 フィールドワーク

フィールドワークの報告



1 班 新潟県立津川病院・東蒲の里

2015 年の夏はお盆が過ぎたら急に涼しくなりました。早くも初秋を感じる 8 月 27 日、フィールドワークを行うため津川へ向かいました。私たち 1 班は、学生 4 名（新潟薬科大学薬学部薬学科 5 年白井柚乃さん、新潟大学歯学部口腔生命福祉学科 3 年村山未帆さん、新潟大学医学部保健学科 2 年笹川由香さん、新潟医療福祉大学医療技術学部言語聴覚学科 2 年大井菜未さん）という、幾つかの大学・学部が揃うにぎやかな構成でした。

新潟県立津川病院に到着、玄関で若狭副看護師長にお出迎えいただきました。以降のプロ

グラムは若狭副看護師長の司会・進行により進められました。

病院 2 階の機能訓練室で高野事務長にご挨拶をいただいた後、草野看護部長から阿賀町の地勢および津川病院の概要を紹介していただきました。「狐の嫁入り」で有名な阿賀町は、面積は広く、人口は年々減少傾向を示し（現在約 1 万 2 千人）、更には高齢化率 40 %以上（県内 1 位）、などの特徴を有する地域です。この地域で医療・福祉・介護を円滑に行うための津川病院の役割について、お話しいただきました。



最初のプログラムは吉村副看護師長（嚥下・口腔ケアワーキンググループ）から、誤嚥性肺炎予防のための口腔ケアと摂食嚥下に関して、ご講義いただきました。具体的な内容は、摂食・嚥下のメカニズム、食事や服薬時の誤嚥の予防法、口腔ケアの方法について、実際的なお話をして頂きました。医学的知識や臨床経験のない学生に対してもわかり易く、これから始まる実習のための基礎知識の確認ができました。

その後、「東蒲（とうかん）の里」にお伺いしました。この施設はショートステイとデイサービスも行っている特別養護老人ホームです。津川病院の隣に位置し、病院から渡り廊下で移動できます。この施設の機能訓練指導員の五十嵐さんから「東蒲の里」での取り組みをご紹介いただいた後、利用者が昼食前に行う嚥下体操（「瀬戸の花嫁」にあわせて行います）、その後の食事の様子を見学しました。嚥下機能の程度に合わせた食事内容の確認もさせて頂きました。スタッフの方の介助により、皆さんスムーズに食事を摂られておりました。

これにて午前のプログラムを終了し、一旦津川病院に戻り昼食のお弁当を頂きました。

午後からは、再び「東蒲の里」に移動し、午前中もお世話になった五十嵐さんに同行し、経管・経腸栄養をされている方の口腔ケアの実際を見学いたしました。ほぼ脳梗塞により寝たきりで意思疎通が困難な方でした。緑茶を浸したガーゼや舌ブラシ、其々の方用に加工した歯ブラシを使用します。それほど汚れていない印象でしたが、これは日々の口腔ケアが行き届いているためです。五十嵐さんは、大きな声で声がけをしながらケアを行っていきます。口腔ケアは、対象者との大切なコミュニケーションの手段となっていることも実感しました。



その後津川病院に移動し、主任理学療法士の吉岡さんから、「正しい食事のポジショニング」について、ミニレクチャーをして頂きました。講義の後は、吉岡さんに加えて金澤看護師長、吉村副看護師長、込山看護師さんの指導の下、実際にギャッチアップ 30 度の椅子に座り、学生同士がゼリーをお互いに食べさせ合い、飲み込みを体験させてもらいました。座学で学んだことを実際に自身で体験できたことは、学生にとって大変刺激的だったようです。



最後に原院長から、地域医療と津川病院の取り組みについての講義を拝聴いたしました。高齢化の進む阿賀町が抱える医療・福祉問題と対策、その上で津川病院の目指すところを熱く語っていただきました。この講話は、職種は違えど共に医療人を目指す学生にとって、それぞれの立場から自身の将来の役割について考えるきっかけとなったと思います。

以上が私たち 1 班のプログラムでした。このように知識の習得・実習体験ともに大変充実したものでした。プログラムの企画、そして 1 日を通して引率していただきました若狭さんには大変感謝しております。

最後に、ご多忙のところ私たちのために時間をつくっていただきました、原先生をはじめとする津川病院関係者の方々、東蒲の里の皆様、そしてご協力いただきました患者さん、利用者さんご家族の方々に御礼を申し上げます。ありがとうございました。

2 班 デンタルクリニックツチャ・エバーグリーン

午前 9 時 40 分過ぎにデンタルクリニックツチャに到着し、診療所内の一角にて土屋信人院長のレクチャーを受けました。主に健診等で用いるユニットが存在する白とピンクの基調の可愛いお部屋に、パソコンをモニターに接続し、紙資料も用いながらお話を聞きました。

平成 14 年に開業する前は鹿瀬診療所（現在の阿賀町）において勤務されており、福島県境のお宅まで訪問歯科診療に赴いておられたとのこと。そういう幅広いご経験が今の先生のパフォーマンスに繋がっている気がしました。

医科との連携、介護との連携、行政との連携、議員さんとの連携そして歯科同士の連携を図りながら、組織的対応と顔の見える関係構築造りを実践されてきており、今年の



3月から新潟県歯科医師会が推進している在宅歯科医療連携室を燕地区で立ち上げられました。

訪問歯科診療導入には、内部体制の確立、外部との関係作り、メディカルインタビュー能力の向上が大切であり、院長一人だけの気持ちでは長続きしないので、歯科衛生士、歯科助手などスタッフとのチーム連携だけでなく、患者さんや家族の視点に立って、細かいところまで気配りする姿勢には感銘しました。

13:30～

介護老人保健施設エバーグリーンで土屋先生と待ち合わせ、訪問歯科診療で使用する機材、材料等を車から降ろし施設まで運びました。機材は20kgほどの重さがあり、運搬の大変さを体験しました。その後、事務課長さんより施設の見学・説明をしていただきました。介護食は館内で手作りして提供しているとのことでした。これは珍しいそうです。そして、訪問歯科診療が始まりました。3名の患者さんの歯科診療見学とアシストの体験をしました。



ポータブルのレントゲン撮影器で歯のレントゲン撮影をし、麻酔の注射をして歯の根の治療を行いました。道具さえあればどこでも歯科治療ができることがわかりました。治療中はペンライトを持って先生が治療を行いやすいように術視野を明るくするお手伝いもさせていただきました。義歯洗浄の方法のお話もあり、実際に口腔ケアも体験させていただいて患者さんと触れ合うことができました。

診療中は先生の優しい言葉がけや、歯科衛生士・助手の手際の良い準備を拝見し、熟練された方でないスピーディーな診療は行えないなと思いました。患者さんの治療内容をわかりやすいようにカルテに記入し 職員へ行ったことの申し送りをしておられ、ここでも連携の大切さを感じました。診療の後片付けをし、荷物を車に積んで施設を後にしました。



16:00～

とても素敵なクリニックに到着後、総括を行い、それぞれ感じたことや質問をしました。通常の診療や訪問歯科診療でお休みがない中で、大変貴重なお話をしていただき、先生のその優しいお人柄に感銘いたしました。ありがとうございました。

3班 豊浦病院

引率者 黒川 允、斎藤 真紀
参加学生 新潟大学医学部保健学科 1年 長濱愛香
新潟大学歯学部口腔生命福祉学科 3年 渋谷瞳
新潟薬科大学薬学部薬学科 5年 五十嵐李奈
川崎医科大学医学部医学科 5年 玉川大朗

実習内容

8:30 新潟医療人育成センター前集合
8:45 ジャンボタクシーにて出発
9:20 豊浦病院着
9:30 金子事務長、野田看護部長、塩谷病院長代理の講義

講義は、現在の豊浦病院の規模の説明から始まった。具体的には6階建ての建物で2/3/4Fは医療保険適用病床の60床、介護保険適応病床120床となっており、5/6Fは介護老人保健施設療養棟100床で構成されているとのことであった。基本は療養病棟で、死因の大きな問題に誤嚥性肺炎を挙げられた。



引き続き、愛広会ネットワークとしての新潟県での施設等の説明があり、質疑応答に入った。この地区での在宅療法のお話を聞くと、ある程度過去に遡ると看取りを含めて開業医が対応していたケースが多かったものの、昨今、訪問診療は行うケースはあるが、看取りを対応していないケースが大半であり、この地区の大きな問題として「どこで亡くなるか？」「どのように亡くなるか？ケースによっては点滴や経管栄養の必要性はないのではないか？」という話になり、実際には隣の特養での看取りの対応をこの病院で行っているとのこともあった。

10:00 木戸寿明先生（木戸歯科医院院長）より口腔ケアの講義を行って頂いた後に、豊

浦病院の病棟見学を行った。病棟では実際にリハビリ（首や肩の運動など）を行っている患者さんの見学などを行った。

12:00 昼食

13:00 口腔ケア等の実習を行うため、再度病棟へ。最初は歯科衛生士の口腔ケアの実際を見学し、その内容を記載した処置表などを拝見させて頂いた。続いて、動揺歯がある患者のコンサルテーションがあり、抜歯を選択され、その介助をさせて頂いた。学生は木戸先生の思い切りの良さと実際に抜かれた歯をみて感嘆した様子であった。

引き続き、上歯の洗浄を行う患者さんがいたため、この介助も行った。口臭も強く明らかに口腔ケアを行ったほうが良いと考えられる方であったが、一方で認知も強いいため抵抗も強く、洗浄を行うのに労力を要し、超高齢社会における治療の難しさを体験できたものと思われた。



15:00 質疑応答

16:00 豊浦病院発

17:00 新潟医療人育成センター到着し、解散



4 班 中条愛広苑

朝から薄曇りではあったが暑くもなく、寒くもない実習日和の天候であった。午前 8 時半に医療人育成センター前に集合した 4 班は時間ちょうどに出発した。行き先は、胎内市の

中条愛広苑であった。約1時間のドライブの後に午前9時40分少し前に愛広苑に到着すると既に事務長の佐藤さんと苑を担当しておられる歯科医師の有松先生が玄関先で待ち構えていて下さった。

まず施設概要についての説明を伺った。愛広苑は特養ではなく老健であるために介護保険の適用を受ける、また特養と違って常勤の医師もいるために簡単な医療処置をすることは可能とのことだった。入所している方の多くは長くいる方が多いのだが、老健の本来の役割は慢性期の療養から在宅へと向かう途中に位置しているはずなのだが結局、なかなか在宅へ向かえない方が溜まっていつてしまっていることが問題である、ということだった。認知機能が保たれている入所者の方は夫婦で入所していたり、身の回りの持ち物がたくさんあるような環境に居られるのだが、認知症が進んでいくと誤食や誤飲などの問題もあり、だんだんその持ち物が減って行くという話も伺い複雑な気持ちになった。結局、人間が生きていくために必要なものはそれほど多くはないのかも知れない、と思った。



施設を一通り見せてもらった後に、施設長の渡邊先生からもお話しをいただいた。渡邊先生は現在87歳とのことであったが、とてもその年齢に見えず、実にテキパキと仕事をされていた。



その後、管理栄養士の方から様々な形態の食事を実際に見せてもらった。刻み食、ミキサー食などいろいろとあり実際に口にしてみることもできた。利用者の状況を見ながら食形態を変えているということできめの細やかな対応をしている様子が窺えた。また有松先生からも、この地域や施設における診療の実際について伺った。その後、歯科医師会から派遣されているという歯科衛生士の方が口腔ケアを行っているところも見学した。歯科衛生士の方が入り、定期的に口腔ケアを行うようになってから、高齢者施設特有の「臭い」が無くなっていったとのことだった。そう言えば、高齢者施設にありがちな「臭い」をこの愛広苑で

は感じる事ができなかった。この様な、行き届いたケアを行うことで施設の「臭い」が無くなり、また誤嚥性肺炎などの疾病が激減していく現状を見ると、口腔ケアの重要性を改めて実感した実習であった。お世話になりました愛広苑の皆様、渡邊先生、有松先生にこの場を借りて御礼申し上げます。



5班 よねやまの里・柿崎第2 デイサービスセンター

参加学生

新潟薬科大学薬学部薬学科 5年生 清水茉耶

新潟医療福祉大学医療技術学部言語聴覚学科 2年生 鷹橋鈴香

新潟大学医学部保健学科 1年生 高橋尚子

帯同者

黒川 (亮)、玉木

8:30 新潟医療人育成センター前に集合、点呼、全体写真を撮影

8:45 ジャンボタクシーにて上越市柿崎区よねやまの里へ出発

10:30 よねやまの里に到着

【特別養護老人ホーム よねやまの里にてオリエンテーション】

到着後、石田浩二施設長と薄波歯科衛生士にご挨拶。

施設内で、よねやまの里が属する、「社会福祉法人松波福祉会」について、法人概要とそれに沿う形で、介護保険法についてのレクチャーを受けた。松波福祉会には、「よねやまの里」の他に「柿崎第1 デイサービスセンター」、「柿崎第2 デイサービスセンター」、「柿崎地区包括支援センター」と合わせて4つの施設を有しており、それぞれの施設で、長期療養、ショートステイ、デイサービス、訪問介護、ケアマネジメントといった事業を展開しているとのことである。「24時間365日の支援」が松波福祉会のポリシーとのことであり、国も同様の方針に移行しようとしているとのことであった。

個人的には、柿崎地域包括支援センターの事業内容が興味深かった。同センターは、介護認定上「要支援」以上となる方以外も含んだ地域の高齢者全体を支援していく福祉の総合窓

口であり、介護や健康だけではなく、財産管理やいわゆる「オレオレ詐欺」、さらには、虐待についての相談も受けているとのことであった。これらの相談は、高齢者ご本人のみでなく、ご家族や近隣住民も対象としており、福祉施設と地域とが相互に関わりあうことで利用者との信頼関係が得られるのだと感じた(この報告書を書く際、某老人ホームでの虐待が報道された。介護の現場は密室になりやすいことで問題が放置されやすい環境にあるが、事業内容を利用者だけでなく地域全体にオープンにすることで、密室化は防げるのだと思われる)。



また、隣接する県立柿崎病院とは経営母体は異なるものの、渡り廊下で一続きになっているため、密な連携がとれており、入所者の急変時や入院が必要になった時などの対応をスムーズに行ってもらえるとのことであった。

一方、終の棲家となる特養の入所待ちが多いことは、この地域でも例外でなく、本来、一時的な保護や家族のリフレッシュを目的としたショートステイが、特養待ちの場となってしまっているという問題点についてもお話いただいた。

11:00 柿崎第2デイサービスセンターへ移動

【柿崎第2デイサービスセンターにて口腔ケアの現場見学】

薄波歯科衛生士の運転する車をジャンボタクシーで追い、柿崎第2デイサービスセンターに到着。昼食前であり、30名程の利用者がフロアに勢ぞろいされていた。口腔衛生管理体制加算、口腔機能向上加算が算定可能になったことに伴い、利用者へ月1回の口腔機能評価を行うようになったとのことであった。具体的な内容は、反復唾液嚥下テスト(RSST)と「健口くん」を用いたオーラル・ディアドコキネシスで、これらをあえて利用者間にシームレスに行うことで、利用者自身の口腔機能評価に対しての参加意識が高まるとのことであった。

その後、食事がフロアに運ばれてきた。それぞれの嚥下機能にあわせた主食が個々に配膳され、大皿に盛られた肉料理と魚料理の希望するものを取り分ける形式で大変おいしそうだった。魚料理は、切り身の物とフレーク状にしたものに分けられており、これも嚥下機能別の食形態となっていた。

食前の「ごつくん体操」を行ってから、昼食を開始。魚料理より肉料理に人気があったことが印象的だった。

食後は、衛生的口腔ケアを行う。薄波衛生士と、看護師の2か所にわかれて行われるが、30名の口腔ケアを1時間前後ですべて行えることに驚いた。

これは、一人の口腔ケアに5分かかる計算となるが、ケアの間もしっかり声掛けを行い、利用者も笑顔でケアを受けておられた。更に、口腔ケアだけではなく食後の排泄、下肢等の運動を一連に行ったうえで、各利用者の個室へ誘導(その後は昼寝をされるとのこと)するところまでが一本の動線上でシステム化されており、一切の無駄な動きが無いことに感動した。後に薄波歯科衛生士からお話を伺ったが、口腔ケアを待たせては、利用者の口腔ケアに対してのモチベーションが落ちてしまうため、スピードには大変気を使っているとのことであった。



13:30 「中野茶屋」にて昼食



14:30 よねやまの里へ移動

【特別養護老人ホーム よねやまの里にて総括と質疑応答】

最後に薄波衛生士、渡辺次長から、口腔ケアの取り組みについて、ご説明をいただいた。

薄波衛生士は、元々、歯科衛生士の資格を有していたが、ケアマネージャーとして松波福祉会で働かれていたとのこと。ケアマネージャーの仕事にも慣れてきたところで、再度、歯科衛生士としての活躍の場がほしいと、理事長に直訴までされたとのことである。当時は、上記のような保険算定や、口腔ケア自体も一般的なものではなく、口腔ケアの価値をグループ内に浸透させることに大変苦労されたことを渡辺次長からもご説明いただいた。

また、今後、団塊の世代が利用者となる時代が来るが、現在の利用者とは価値観や健康に対する意識、残存歯の数等、状況が大きく変化することが予測される。それぞれの世代にあった対応も課題となるとのことのお話しもあった。

質疑応答では、清水さん、鷹橋さん、高橋さんいずれも積極的な質問と多くの感想が述べられた(詳細については、感想文の頁をご参照ください)。多職種連携における口腔ケアの位置づけをよく理解してくれたようである。

16:00 よねやまの里非公認キャラクター「よねっしー」に見送られながら新潟市へ出発

17:00 新潟医療人育成センター前に到着・解散



3日目 ワークショップ

きのう何を見て聞いて感じたか



2日目のフィールドワークで訪問した施設で見て、聞いて、体験したことをもとに、それぞれの班で前日に設定した目標を達成できたか、どんなことが印象的だったかを報告し合い、スライドにまとめて発表しました。



参加者の感想



新潟大学医学部保健学科3年 安孫子 陽一

今回「口腔ケア」について学ぶことができるということで、自分の専攻ではほとんど触れる機会がない知識を深めることができる、貴重な機会になると思い参加することにしました。

口腔ケアについては、以前ボランティアで健康教育を行ったときに、「パタカラ体操」を行っていたことがあり、だいたいの概要はぼんやりと知っていましたが、深くまでは掘り下げず、表面的なことしか理解していなかったので、今回のこのワークショップとフィールドワークで学んだことは非常に多くありました。

今回、自分は介護保健施設に伺い、口腔ケアは勿論のこと、介護の実際の現場を見学したりもできました。施設には、高さの低いベッド、ブザーのなるマット、リハビリ器具など高齢の方、障害のある方がより快適、かつ安全に過ごせる設備が充実していてとても驚きました。

口腔ケアについては、衛生士さんが一人ひとり、汚れがあるか、虫歯があるかなどのチェックをスピーディーに、かつ正確に行っている姿が非常に印象的でした。話を聞くと、自分で歯を磨くより衛生士さんにケアを行ってもらった方が、磨き残しもなく汚れが付きにくいそうなので、入所者の健康がしっかり維持が出来ると言っていて、介護現場における口腔ケアの必要性を改めて認識することができました。

また、自分の見学した施設では、高齢者のお口の健康を保つ、すなわち食べたり、話したりする楽しみをきちんと感じる事が続けられるように、歯科領域職種（歯科医師、歯科衛生士）だけでなく、それ以外の職種の方々も連携して工夫していることが、この実習の中で

一番心に残りました。看護師、介護職の方がケアにあたっているのは勿論ですが、言語聴覚士や管理栄養士なども、そういった「楽しみ」を守る重要な役割を果たしていることを初めて知りました。言語聴覚士はお口のケア、そして嚥下機能の評価などを行い、歯科衛生士さんに報告などを行ったり、管理栄養士に評価を報告してその人が摂取する食事形態の参考にしたりしているという話を聞き、今まであまり関心が向けられなかった職種の人が、実はとても大切な働きをしていたのだと改めて感心しました。栄養士の方は百人以上いる入所者の献立、栄養、食事形態について事前に情報収集をし、施設の高齢者の方が少しでも食べる楽しみを感じてもらえる工夫を懸命に凝らしていたことが非常に強い印象を受けました。さらに、歯科医師の方からもレクチャーを受け、命を守る、そしてリハビリの役割を担う「口腔ケア」の必要性をしっかりと認識することを学び、お口のことについてはあまり関わらない他職種（検査技師など）の人にも必要になる知識だなと感じました。

今回のワークショップとフィールドワークを通して感じたのは、「口腔ケア」という一つのケアだけでも様々な職種の人が関わりあい、お互いに知識を共有する「多職種連携」が現場できちんとなされているな、ということです。超高齢社会に向けて、今後自分が医療人として現場に出たとき、何ができるかについて考えることができた、非常に貴重な経験になりました。気になる人にはお口のことについてお声掛けしたりできるなど、いつか患者さんのことをより気遣うことができるような人になりたいなと思いました。

新潟薬科大学薬学部薬学科5年 五十嵐 李奈

最初、「口腔ケア」と言われてもピンとこないような状態でこのワークショップに参加しました。薬学部では「超高齢社会」や「多職種連携」と言う言葉はよく耳にしますし実際に授業でも学びますが、口腔ケアに関しては全くと言っていいほど触れていませんでした。薬を飲み込むうえで必要な嚥下機能や剤形の選択ばかりに目を向けていましたが、今回のワークショップやフィールドワークを通して、もっと口腔ケアについての知識を身に付けるべきだと思いました。

フィールドワークでの豊浦病院の見学は、歯科医師の方に付き添い患者さんのケアを間近で見ることができました。高齢者の方は、普段なにげなく私達ができている歯磨きや食事でも誰かの助けを借りなければ満足に行えない人が沢山います。その方たちへのケアの仕方にも様々あり、一人ひとりに合った方法で行うことはとても大変だと思いました。豊浦病院では、外部から来る訪問歯科医師が患者の口腔内の状態を把握し、カルテを作って看護師や介護士、歯科衛生士がケアする際に困らないよう工夫していました。やはり常勤医師ではないため、日々のケアは看護師さん達に任せるしかなく、情報共有の大切さを感じました。今後の情報はどんどん電子化され、誰がどこにいても瞬時にやり取りできるシステムの開発も進んでいくと思います。ただ先輩の医療従事者の中にはそういった変化に対応できない人も少なからずいるようで、これから新しい時代を担っていく私達の役割はそんなところにもあるのかなと感じました。

ただ、どれだけ医療が発達し情報が電子化したとしても、人と人の繋がり無くしてはいけないものです。「多職種連携」とあるように、様々な専門知識を持った人が一つのチーム

を組んで一人の患者を支えることこそ、よりよい医療を築く第一歩だと思います。豊浦病院ではミールラウンドというものを行っており、3ヶ月に1回程いろんな職種の人が患者の食事の様子を観察し、それぞれの観点から口腔ケアや嚥下について話し合う場を設けているそうです。私も薬剤師としてそこに加わり、薬の飲み込みやそれに伴う剤形の選択などの点で他の職種の方と関わっていけるようになりたいと思いました。今回、話しを聞いたところによると、薬剤師も患者の歯磨きの手助けを行っても問題ないとのことなので、正しい知識を身に付け少しでも手助けになれば良いと思いました。

今回のワークショップ全体を通して、口腔ケアに薬剤師が関われる事は何だろう？と考えて、薬の飲み込みにも影響してくる嚥下についてより深く学べたと思います。唾液の分泌を促す体操や正しい歯磨きのやり方など、薬学部にいただけでは学べない、より現場で必要となってくる知識を沢山身に付けることができました。貴重な体験をさせて頂けたことに深く感謝致します。これからの学習に繋がりたいと思います。

新潟医療福祉大学医療技術学部言語聴覚学科2年 大井 菜未

今回のWS/FWでは、初めてする活動が多く、自分なりの課題や反省もみつきり、とても収穫の多い3日間でした。

まず、初日のWSについて。私はこれまで他大学で年齢や学部も異なる人達と意見を交わす機会がなかったため、1つのことについてそれぞれの異なる視点から意見が飛び交うのが新鮮でした。初日は講習と討議が交互に行われ、決められたスケジュールに従って次から次へと課題をこなしていきました。私たちC班はWSにおいて、活発な意見交換が行われたものの、時間配分に苦しまれる部分が多く、決められた時間通りにスムーズに活動ができるよう、先読みした行動と無駄のない行動が行えるようにすることが課題だと感じました。

次に2日目のFWについて。私は、阿賀町にある津川病院と、それに隣接する特別養護老人ホーム東蒲の里に実習に行きました。私は、来月に臨床実習を控えているため、まだ実習の経験がないのでこれが初めての臨床実習となりました。津川病院では職員の方の温かい歓迎があり、限られた時間の中、様々なプログラムを私達の為に用意してくださいました。まず津川病院の説明で、阿賀町では県内で1番の高齢化が進んでいるため、急性期医療、地域医療、高齢者ケアという3つの特徴を持っていると伺いました。その中でも、地域医療のことが印象に残っていて訪問診療・看護のために電子カルテを導入していたり、ナイトスクールという地域と医師の意見交換の場が設けられていたり、24時間365日連絡を取れる体制で地域の在宅医療を支えていたり、様々な取組みをしているようでした。実際、昼食休憩の際でも、看護師さんからの阿賀町の紹介、お勧めのスポットやお祭りについて教えてもらい、地元愛を感じました。東蒲の里では、言語聴覚士の資格を持つ機能訓練指導員の方が、理学療法士、作業療法士、歯科衛生士など幅広い職を担う形式で働いていました。その方の案内で、施設で行っている嚥下体操や経管栄養前の口腔ケアを見学させていただきました。その後また津川病院に戻り、口腔ケアやポジショニングの体験、嚥下食の食べさせ合いをしました。ポジショニングではギャッチアップ30度と90度を体験させてもらい違い

を体感することができました。嚥下食はお茶をゼリー状にしたものをいただきました。食感が面白く印象的でした。

3日間全体を通じてすごく得るものが多く忘れられない経験になりました。

新潟大学歯学部口腔生命福祉学科2年 大野田 美祈

今回のワークショップとフィールドワークの行動目標の中に、「口腔ケアにおけるチーム医療・多職種連携の意義を説明できる」というものがある。これについてワークショップとフィールドワークを通して理解が深まった。

ワークショップでは、それぞれ違う分野を学んでいる学生が集まって話し合うことで、自分が持っている視点とは異なる視点に触れることができた。例えば、薬学部の学生からは、薬の作用で口腔や顎骨に与える影響を、看護を学ぶ学生からは、老々介護や認知介護などの状況と口腔ケアの関わりについて聞くことができた。以前から、自分が学ぶ分野にかたまらず、様々な視点を持って物事を考えられるようにしたいと思っていた。実際にその様々な分野を学んでいる人と話をしてみるということが重要になってくるということ強く感じた。

フィールドワークでは、多職種連携について現場を見て理解を深めることができた。口腔ケアというと、歯科医師や歯科衛生士など歯科分野に特化したことのように考えていた。しかし、実際見学させていただいた施設では、言語聴覚士も積極的に関わっていた。言語聴覚士は痰などを吸引する資格があり、その資格は口腔ケアを行ううえで有利だろうかと思った。私は、今歯科の分野を学んでいるのだが、他の職でも歯科分野に関わりがあるものが存在すると分かり、将来働くうえでは他の職種についても理解をし、そのうえで協力していくことが必要だと感じた。それぞれの職で専門的にできることがあり、患者さんに対しては良くしようという同じ気持ちを持っていると思うので、お互いに理解し、協力関係を築けるようにしていきたいと思った。

今回のワークショップとフィールドワークを通して、今までより考え方の視点を増やせたように思うので、今後の学習へ活かしていきたい。

新潟大学医学部保健学科2年 笹川 由香

この度のトータルヘルスケアワークショップとフィールドワークでは様々な学習ができ、大変貴重な経験となりました。1日目は屋内にて、他大学、他学部の様々な分野で学ぶ、日頃大学では出会うことのできない多くの学生の皆さんと交流しながら、一緒に講義を受けたり、グループワークをしたりして基礎的な知識や理解を深めました。初対面であったためとても緊張していましたが、話し合っていくうちに考え方や視点がそれぞれ異なっていると感じ、多くの発見をすることができたと思います。

2日目は、5つの班に分かれ、県内の病院や施設を見学させていただきました。私は阿賀町にある県立津川病院と併設されている東蒲の里を見学させていただきました。津川病院は急性期医療と同時に、在宅療養支援病院として在宅療養生活のケアも担っており、入院時

から退院調整看護師やケアマネージャー、家族などを含め在宅への移行支援を行っているとのことでした。在宅への移行後は「出向く医療」としての訪問看護や訪問診療、巡回診療を行ったり、24時間365日看護師が常駐しサポートを行ったりすることで、地域での生活をより安心したものにできるよう尽力されています。また「ナイトスクール」を開き高齢者を中心とした地域住民への健康教育を行い、健康への意識づけをしたり予防知識をつけたりと、町全体で、高齢者同士で、自分自身で、健康を支えられるよう支援も行っています。私は「ナイトスクール」のような活動は保健師など行政が行うものというイメージを持っており、病院がこういった活動をしていることに驚きました。今回のテーマである「口腔ケア」については、津川病院でも東蒲の里でも、重点を置いてケアを行っていることがわかりました。院内では看護師が毎食後スポンジブラシを用いて口腔ケアを行っているそうです。また患者さん向けや家族向け、職員向けのパンフレットを作成し、口腔ケアの重要性の理解を広めるよう取り組まれています。院内で嚥下・口腔ケアワーキンググループを結成し、研修を行い、院内での嚥下・口腔ケアの中心となって活動されているそうです。東蒲の里では入所者や利用者の方々の自主性を尊重しつつ、歯ブラシで口腔ケアを行っていました。ほとんどの方が自分自身で食事を摂取し、口腔ケアをされていて、職員がアドバイスやサポートをする形をとっているようでした。食事前には誤嚥予防体操を行っており、職員と一緒に利用者の方々が楽しそうに体操をしている姿がとても印象的でした。

3日目は参加者全員が集合し最終報告を行いました。初日よりスムーズで活発なグループワークや発表となり、他班の体験や情報を共有できたと思います。今回見学させていただいた病院や施設では、それぞれが持つ限られた資源や環境の中で嚥下・口腔ケアを積極的に多職種と連携して行っていることがわかり、現在の臨床の現場での取り組みから口腔ケアと多職種連携の重要性を考えることができました。

私はこのワークショップ・フィールドワークから貴重なものを沢山得ることができたように思います。関わってくださった皆様に感謝しています。本当にありがとうございました。この経験と感謝の気持ちを忘れることなく今後活かしていきたいと思います。

新潟薬科大学薬学部薬学科5年 佐々木 有菜

単科大学だとあまり他職種との連携がなく、初めての他職種とのワークショップでした。口腔ケアというテーマで、異なる職種の学生の意見を聞いて、とても良い経験になりました。また、今までシラバスはもっていてもGIO、SBOsに着目したことがなく、具体的な目標を立てて行動する大切さを知りました。

私が訪問した中条愛広苑という胎内の介護老人保健施設は特別養護老人ホームに入る順番待ちや、重度の認知症の人などが暮らしていました。転倒防止やベッドを低くしたり、夜に一人でトイレに行かないようにベッドを離れたらブザーが鳴る、ドアを開けたら風鈴が鳴るなどの工夫がされていました。歯科衛生士さんが口腔ケアを行う様子も見学でき、その時はスムーズにケアが行われていると感じたのですが、後程ここまで手早くできるようになるまで大変な努力があったことを知り驚きました。最初は歯科衛生士さんが入っても口腔ケアを希望する患者さん、家族が少なく赤字になってしまったそうです。今でもたとえ数

千円でも断る患者さんの家族がいて、患者さん本人からクレームが入ることがあるそうです。また、家族の了承を得られとしても、患者さんがケアを嫌がり殴られることもあると聞きました。口腔ケアを行う前に顔を覚えてもらい、コミュニケーションをとることが重要だそうです。患者さん、家族とコミュニケーションから始まる場所は医療従事者全般が必要だと思いました。訪問した施設では、薬剤師は不在で、薬剤はすべて外注とのことでした。薬はディケアの方を見ると、名前が書いてあるポーチに小分けして入っていて、ファイルで服薬確認・家族の人と連絡しているとのことでした。薬剤師が何故不在なのか尋ねたところ、介護施設におく法律がないこと、人件費がかかる、就職を希望する人がいないという3点があがりました。薬剤師のコストパフォーマンスや意義については厳しい意見をよく耳にするので、薬剤師が必要とされるにはどうしたらよいか考えるきっかけになりました。施設の昼食時に栄養士さんの意見を聞いたり、歯科の先生から口腔ケアの説明を受けることができました。他に ST、PT さんのお話しも聞くことができ、今回の施設で様々な職種の方の意見を聞くことができました。また、学内でのグループワークでも他職種の学生と関わることができ、良い体験となりました。

新潟大学歯学部口腔生命学科3年 渋木 瞳

私は、多職種連携について学びたい、そして今回のテーマに「口腔ケア」と「超高齢社会」という歯科と福祉に関連することがあったので参加してみようと思いました。

1日目のワークショップでは KJ 法で「口腔ケアを通して考える超高齢社会の課題」について討議し、口腔ケアや福祉に関してはなじみがあると思っていたのですが、他の学部の方たちの意見を聞くと、全く違う視点からの意見がありとても参考になりました。多職種連携が重要であるというのはすごく言われていますが、今回のワークショップを通して、お互いの知識を合体させてより良いものができる点で、とても重要であるということを学ばせていただきました。

2日目のフィールドワークでは、口腔ケアの重要性について再認識することができました。とても印象に残っているのは訪問診療で先生が作成途中の義歯を調整する時に立ち合わせて頂いた時のことです。患者さんはだんだん痩せてきていて、早く新しい義歯で食事をし、元気を出してほしいとおっしゃっていました。その患者さんは一見、元気がない様子でしたが、先生が「次、新しい入れ歯を持って来るよ」と言うと、喜んでいました。このことから、食べるということのは QOL の向上に大きく関わっていると感じました。そして、食べる機能を維持するためには、ただ噛めるということだけでなく、嚥下機能や栄養状態、全身の健康状態など様々な面でのサポートが必要になってくるのだと思いました。今まで口腔ケアというと、歯科医師や歯科衛生士が率先してやっていかなければいけないというイメージでしたが、様々な医療従事者のサポートが同じくらい重要でチームとなって一人ひとりの高齢者を支えていくことが大事であると学ぶことができました。

フィールドワークでお会いした木戸先生は患者さんに対しての思いがとても強く、地域での独居老人をみんなで支えていかなければならないとおっしゃっていました。超高齢社会ではこのような姿勢がとても大切であると感じました。

今回の経験を活かして、歯科領域だけでなく様々な場面で活躍できる歯科衛生士になりたいです。

新潟薬科大学薬学部薬学科5年 清水 茉耶

今回、薬学部の学習ではあまり触れられることのない分野におけるワークショップでしたが、実際に薬剤師としてトータルヘルスケアにどの様に関わることが出来るか、また多職種との連携を学ぶ点として他学生がどのような考えを持ち、何に着眼しているかを知る良い機会となりました。口腔ケアの不良が引き起こす全身的影響や社会的影響というものも深く考えたことはありませんでしたが、フィールドワークで現場を見ることで口腔ケアが生活に及ぼす影響を感じる事が出来ました。例として、食事の摂れなかった施設利用者が、口腔ケアで痛みや出血を抑えたことで食事が出来るまでに回復したことや、10年間口腔ケアに取り組んだことで施設内の発熱者数が格段に減り、近年ではインフルエンザの感染も減少傾向である、という実績が挙げられますが、これらのことから食生活の向上や感染予防と口腔ケアの深い関わりを感じられました。また、口腔ケアを行っている際に、医薬品が入れ歯に挟まっている事例があったことも知ることができ、服薬上の問題としても嚥下や口腔状態が関わってくることを知りました。今回の事例では、歯茎に化学やけどを負ったと言う話でしたが、ビスホスホネート製剤による顎骨壊死の患者さんの口腔も実際に見せていただくことができ、薬の及ぼす作用の危険性や実際の状態も知ったことで、どの様に患者さんへの指導として活かすことが出来るか考え直す機会となりました。指導中、口腔を見る機会はあまり無いものと考えていましたが、副作用の出やすい薬剤を利用している患者さんなどには積極的に口腔状態を見せていただくなど、その様な行動を起こしやすいよう口腔ケアの知識を伝える活動が必要だと感じています。

今まで、言語聴覚士の仕事について深く考えてはいませんでしたが、口腔に関するリハビリや指導と言うものが生活の中で思いのほか高い比重であることなど、参加学生との討論でも感じる事ができました。また、今回よねやまの里で介護職としてではなく歯科衛生士という職で働く方からお話を聞いたことで口腔ケアの実際を見る事が出来たことは勿論ですが、社会で未だ認められていない分野の中でも職能を活かし、自分のやるべきことを進めれば結果が出せることを痛感しました。

未だ勉強不足な分野が多いため、現存する仕事でしか薬剤師の職を活かす場が思いつきませんが、様々な場での知識を深め、職能を活かした活動を行えばと強く感じました。今回この様な場に薬学生として参加させていただいた経験を大切にして、今後学んでいきたいと思います。

新潟薬科大学薬学部薬学科5年 白井 柚乃

今までは、口腔ケアや嚥下について、話聞いていたことはあったが、どのように行っているのかは分からないことが多かった。また、先日まで行っていた臨床実務実習で、がん治

療に触れる機会が多くあったのだが、副作用の口内炎の対策に口腔ケアを勧めていた。患者さんからもケアの方法について尋ねられることも少なくなかったので、今回のフィールドワークで、どのようにして口腔ケアが行われているかを実際に見学や体験することで学べた。歯磨きの方法に関しても、力の加減や歯ブラシの持ち方等を指導して正しくケアをしてもらうことが大切だと知ることができた。また、自分でケアが出来ない患者さんに対しては看護師さん等の医療スタッフがケアを行っている。その際には、患者さんに声を掛けてからケアを始めること、患者さんが疲れないように配慮して行うことを学べた。そして、口腔ケアの重要性について医療従事者に対しては浸透しているが、患者さんやその家族に対してはあまり浸透していないことを知った。誤嚥性肺炎防止目的であること等、なぜ行っているのかを指導して把握してもらうことで、口腔ケアの重要性を理解して、実行してもらうのが大切なのではと感じた。

嚥下に関しては、嚥下困難な患者さんに対しての服用の方法を考える上で学べたことが多くあった。今までは粉碎や簡易懸濁をすれば服用できると思っていたが、嚥下が困難な方はそれでも誤嚥を起こしてしまうことを知った。粉碎や簡易懸濁に加えて、ゼリーにしたり、とろみをつけること、また錠剤をゼリーに埋め込んだりする等の工夫も必要なのだと感じた。食事から応用して考えることもできるのだと学べた。

今回、このワークショップに参加することで、口腔ケアについて抱いていた茫然としたイメージをより詳しい知識に変えることができた。そして、実際にフィールドワークで口腔ケアを体験できたことで、患者さんの感覚や気持ちを知るための助けになった。この経験を今後の学習や将来の業務に活かしていきたい。

新潟医療福祉大学医療技術学部言語聴覚学科2年 鷹橋 鈴香

今回の3日間の活動で一番学んだことは自分から学びに行く積極性です。言語聴覚士が支援していく分野の中に摂食・嚥下・ヘルスケアがあります。ですが、「言語聴覚士」という職名の中には、口腔機能の改善に関連した言葉は出てこず、まだ詳しく講義でもふれていないこともあり、どんな支援をするのかよく分かっていませんでした。口腔ケアが近年重要視されていることは知っていましたが、具体的なものが見たい、利用者の方の様子がみたい、また多職種の方々との連携を通しての言語聴覚士の役割は何なのか興味を持ち参加しました。

1日目から5人1グループでの活動がはじまり、他大学の学生との医療に関する取組みを初めて体験しました。学年も学科も違う中からそれぞれが今ある知識を活用して話し合い、まとめていく作業はとても新鮮で自分の考えを共有し、伸ばしていくことの大切さを学びました。また、お互いの口腔の観察をし、自然と自分から話しかけられるようになりました。1日目の最後には2日目にあるフィールドワークに向けてGIOやSBOsを設定しました。1日目のグループメンバーとはまた違うメンバーで体験するということがあったので、目標について少しでも自分が得た知識を持ち帰り、グループで共有することができるか、また現場での様子を見ることで、将来にどれだけ活かすことができるか考えながら1日目の活動を終わりました。

2日目は、よねやまの里という老人福祉施設を見学させていただきました。よねやまの里はいくつかの施設に分かれており、私たちのグループはその中のデイケアサービスセンターで歯科衛生士の方の口腔検査、食事前の体操、食後のブラッシングを見せていただきました。特に印象に残ったのは食後のブラッシングで、私は実際に利用者の方へブラッシングさせていただきました。見ていただけと違い、歯の根元の掃除はととても大変で力加減にも気を使いながら行いました。今回のフィールドワークで言語聴覚士の仕事はわかりませんでした。口腔ケアの大切さ、利用者の方や他職種の医療従事者との関わりの大切さを学ぶことができました。

3日目には、また1日目と同じグループで体験してきたことを共有しました。それぞれが違う観点から様々な職のヘルスケアを見て話し合えたことはとても貴重で思い出に残る3日間になりました。そして自分の意見を持ち、積極的に発言する良い機会になりました。

新潟大学医学部保健学科1年 高橋 尚子

今回のWSとFWに参加させていただき、自分にとって大きな学びの機会になり、今後何ができるのか考えることができた。

まず、第一に多職種連携という視点について、深く考える場になった。1日目のWSで、学んでいる分野の異なる学生同士で話し合いを行った。各自が用いる用語に、それぞれの専門用語が含まれたり、自分が知らない専門的なトピックスがでたりした。それぞれの意味を確かめ、教えてもらうことで知識を増やし、見方をひろげることに繋がった。また、学んでいる分野が異なることで、問題について注目する観点が違うということを知ることができた。

第二に、医療現場において多職種が協力することが必要不可欠であるということ、改めて学ぶことができた。各専門職が自分の分野の職務に専念し、利用者様に最適なサービスを提供するために、皆が力を合わせるということが非常に大変でもあることを、現場を見学させて頂く中で感じた。私が見学させて頂いた場では、高齢者の昼食後の口腔ケアが、とてもスムーズに行われてシステム化されている印象を受けた。このレベルまで持ってくる為に、中心となって取り組んでいる方の努力や、周囲の方を取り込んで共に協力し合うという意識づけ、利用者様やご家族の理解など複合的に考え行動することの大切さを教わる事ができた。

第三に、実際に体験させて頂くことの重要性を感じる事ができた。ディケアセンターの利用者様の口腔ケアを、学生一人ひとりにさせて頂く機会を用意してもらえた。スタッフの方と利用者様との間に、日々の中で深い信頼関係があったからこそ、利用者様が笑顔で学生に歯を磨かせてくださったのだと感じた。そして、自分の目で見て、実際に歯や舌のケアを行うことで、高齢者の方に接する時の注意点や、口腔ケアの大切さを考えることに繋がった。

今回のWSとFWで学んだり感じたりしたことを、今後の学びの場や、卒業後に医療の現場で働く時に活かしていきたいと思う。これからの超高齢社会において、「チーム医療」や「多職種連携」はととても重要であることを、大学1年生の今の時期に現場を実際に見て体験することができた。自分には何ができるのか、何が必要なのかを考え、実際に行動に移して取り組めるようになれるように生活していこうと思う。

川崎医科大学医学部医学科5年 玉川 大朗

いつもとは異なる夏季実習を経験でき新鮮な3日間でした。毎回医学科の学生だけだと考えていることがだいたい似てくる傾向にあり、面白みがなかったです。

今回、歯学科や薬科、言語聴覚学科、保健学科といったチーム医療に欠かせないメンバーが口腔ケアというテーマを通して自分の専門性を発揮しながら、お互いに共通認識として実習に取り組めたことが大きな収穫であった。超高齢社会において口腔ケアが患者さん、入居者のQOLの改善や予防に繋がり、地域社会の活性化を導く方法の一つだと感じた。いつも大学病院にいと、急性期の患者が多く、なかなか口腔ケアの現場に立ち会えることは難しく、また、慢性期の患者に会えていないという事もある。

実際に、ベッドで抜歯や入れ歯の噛み合わせといった歯科治療を見学できたことは、今後の臨床実習では経験できないと感じた。地域の歯科医は在宅で介護を行っている方や、いつも来ていた患者さんが急に来なくなったら、お家まで行って診療してみたいと感じ、必ず行ってしまうとおっしゃられ、歯科医としての地域医療が少しであったが理解することができた。

口腔ケアの重要性については、誤嚥性肺炎の合併を防ぐものとしてしか考えていなかったが、歯科衛生士の方は、患者さんの感染症（発熱、咽頭炎、インフルエンザ）の発症リスクの軽減、口臭や出血が改善したなど口腔ケアを行って1ヶ月ですぐ症状に反映することが分かったと、嬉しそうにおっしゃっていました。口腔ケアが、患者と医療従事者にとってより良いものであるとは思っていなかった。

わずか3日間であったが、自分の経験をお互いに共有し、口腔ケアとは何かを考えさせられた良い実習であった。

新潟大学医学部保健学科2年 土屋 若菜

私がこのワークショップに参加した理由は、3年間看護について学んだことを生かして、もっと色んなことを、色んな人と学んでみたいと思ったからである。そのため、今回のワークショップのテーマである口腔ケアを一つの切り口として、超高齢社会を支える保健・医療・福祉への理解を深め、「チーム医療」と「多職種連携の意義を学習する」は私にぴったりであると感じた。普段大学では関わることのない薬科大・医療福祉大の人達や、先生方とこうして一つのテーマについて講義・学習を深めることができ、とても新鮮だった。お互いに学んでいる分野が異なるため、グループワークでは、私が看護で学んだことに基づいた意見を述べると、違う専門分野の視点に基づいた意見が返ってきたり、私が知らないような知識を得ることができたし、学生の段階から異なる職種を目指す者で会話・意見交換することの楽しさを感じることができた。また、一日目ではKJ法やカリキュラム、GIOとSBOsなどこれからの学習にも役立つことを知ることができた。目標を立てることは学習の中で必要不可欠なことであり、今までに何度も行ってきたが、GIOやSBOsといった、きちんと

した記述方法に則って目標を考えたことはなかったので、これからに生かせると感じた。

二日目のフィールドワークでは、デンタルクリニックツチャ、エバークリーンといった施設を見学し、実際に訪問歯科診療を行っている様子を見たり、院長さんが行っている取組みや燕市・弥彦の高齢化に伴う歯科の課題についての話を聞いたのだが、歯科と医科の連携、口腔の健康を保つことによる全身への影響、訪問歯科診療の困難さ・意義などとても興味深い内容だった。口腔ケアについては、演習で学習したことがあったり、公衆衛生看護の授業の一環で歯科健診を行う模擬計画を立てたりなど、今までにも学習してきたが、実際に歯科医師で地域の課題の解決に取り組んでいる方のお話を聞くことで、具体的な内容や様子を知ることができた。エバークリーンでの訪問歯科診療の見学では、持ち運びできるバキュームや半導体レーザーを用いて、施設内で治療を行っている様子を見ることができた。SpO₂や顔色をこまめに観察し、治療を続けても大丈夫か確認するなど、安全に配慮した治療を行っていた。口腔ケアを行うことで誤嚥性肺炎の頻度が実際に低下していると職員の方から聞き、重要性をあらためて実感できた。これから2025年問題など、高齢化に伴う課題が多く残るなかで、私たちは医療職として働いていくことになるのだが、そのなかでも、常に「自分には何ができるか」「どのような人達と協力すれば問題が解決できるか」「より多くの方がより健康に暮らせるためにはどうしたらよいか」を自分なりに考え、実行していきたいと思った。

新潟大学医学部保健学科1年 長濱 愛香

今回、はじめて参加させていただいたのですが、先輩方の知識や経験の豊富さに圧倒されっぱなしの3日間でした。それと同時に自分の知識の無さも痛感しました。3日間の中で聞かせていただいた話や、体験の中で思い浮かんだのは、私のひいおばあちゃんのことです。胃ろうをしていたのですが、歯磨きってしていたかな？と思い出してみるのですが、歯磨きの場面を思い出せませんでした。そこで、昨日、家族に確認してみたのですが、口を使って食べている訳ではないからあんまり歯磨きって意識していなかったかも…。と言う答えが返ってきました。当時、ひいおばあちゃんをよく熱を出していたので、もしかしたら、歯磨きをしていたらもっと体調が良くなったのではないかと3日間で口腔ケアのことを学んだ今の私なら思うのですが、残念ながら、ひいおばあちゃんは亡くなってしまっているので、“たら、れば”話になってしまい、もう何もしてあげることが出来ません。2日目の豊浦病院で歯の治療の際に何となくひいおばあちゃんのことを頭に浮かんで、腕を押さえたりするのが少し辛かったです。しかし、口腔ケアがどれほど大切なのか分かったので、重要な仕事なのだと思うことが出来るようになりました。

私は、看護師として将来働きたいと思っているのですが、患者の口腔ケアが看護師の重要な仕事でもあるということを知って、もっともっと勉強したいという思いが大きくなりました。病気を治すということだけではなく、患者さんに寄り添うというのも看護師の大切な仕事だということを大学で学んだのですが、それが今回聞いた入れ歯の話と関連するなと思いました。女性の方は歯がないのを気にされるという話、妻に入れ歯をあの世へ持たせてあげたいから早く作って欲しいという話、写真を撮りたいから入れ歯を早く作って欲しい

という話。これらは、直接的に健康に影響を与える要因ではないけれど、患者さんに寄り添ってケアをするときにとても大切だという風に感じました。機能的な役割の歯ではなく、モチベーションを上げる役割の歯の存在を知ったような気がします。1人の患者さんに対して様々な職種から、様々なアプローチができるのを改めて感じましたし、だからこそ、それぞれの職種の人々が連携していくことが大切だと実感しました。班で発表した際に“他職種連携”と“多職種連携”の2種類の漢字を使いましたが、今は、多職種連携の方がピッタリだと思っています。将来、看護師として働く際には、ひいおばあちゃんにしてあげられなかった口腔ケアをしっかりと患者さんに出来る看護師になりたいと思います。

最後に、何も分からない私をメンバーとして受け入れてくれた参加者のみなさん、そしてこのような貴重な機会をつくってくださったスタッフのみなさん、すべての方々に感謝の気持ちを伝えたいと思います。

本当にありがとうございました。

新潟薬科大学薬学部薬学科5年 野崎 佑子

初日の全体の意見交換・発表を通じて、自分が今まで口腔ケアの問題に対して関心度が低かったことを感じました。しかし、グループで考えを出していくうちに問題点等が見えてきました。2日目のFWでは、デンタルクリニックツチャさんの所でお世話になりました。クリニックの設備には、車椅子に座ったまま撮れるレントゲン装置や、車椅子から診察台に移す際に肘置きが邪魔にならないように折り畳み式になっていたり、体の自由がきかない患者さんのためのうがいをする場所が取外せ、自分で持てるようになっていたり、工夫が多くて驚きました。そういった工夫がなされているのは、メーカーさんと歯科医師さんとの連携というものが大きいと知り、医療スタッフに限らず、メーカーさん等との幅広い連携というものが実感できました。また、老健施設での歯科治療の見学もさせていただきました。私は、今回のFWで訪問歯科治療を行っていることを初めて知り、とても勉強になりました。訪問治療をするにあたってのシステム構築や道具を取り揃える為の費用の負担等は容易でない事がよく分かりました。実際、訪問治療のニーズは多くあり、地域によって体制の充実に差があると土屋先生は問題視されていました。地域差があることの要因の一つには、地域との繋がりが弱いことが挙げられ、そこでも連携の重要性を実感することができました。

先生がおっしゃっていたことで、「顔と顔との連携」という言葉が印象に残りました。顔と顔との連携とは、実際に会ってコミュニケーションをとり、話しをする中で医療人同士、または医療人と患者さん（またはご家族）との繋がりが持て、現状の把握から問題点の抽出までできる関係が様々な場面で役に立つということでした。自分が将来薬剤師になった時に、薬に直結しなくても様々な分野に興味をもっていこうと思えた3日間でした。また、口腔の分野にこんなに踏み込んで学ぶことができたのは初めての経験だったので、大変勉強になり、まだ知らない領域が多いことを感じました。口腔ケアだけでなく、介護領域にも触れることができ、介護の現状を見たり聞いたりすることで、今後自分が薬剤師として患者さんと接する場面ではその患者さんに合わせた対応を心掛けようと思いました。そして土屋

先生もおっしゃっていましたが、自分が働く地域の現状や特性を知っておくことも重要というの、自分が関わる地域の問題や患者さんの問題を掘り起こし、改善に向けて尽力することに繋がるので、連携のポイントになると思いました。患者さんや一般の人、医療に関わるスタッフ等、困っている人、相談したい人の窓口役になればいいと思いました。多くのことを学べた今回のWSとFWはたいへん為になり、今後この経験を活かしていきたいです。

新潟医療福祉大学医療技術学部言語聴覚学科2年 早川 絵莉香

トータルヘルスケアワークショップとフィールドワークに参加してとても有意義な3日間を過ごすことができました。他学校や他学科の方々と関わる経験は今まで全然なく、初めは緊張していて大丈夫なのかとても不安に感じていましたが、グループ討議や発表を何回も重ねていくことで、それぞれの課題について深く考えていくことができました。

1日目は、まず”心に残る学習”で一人ひとり今まで感銘を受けた出来事を絵にし、説明するというのをしました。ユニークな絵や経験を聞くことができとても楽しい学習でした。次に実技講習をしました。二人一組になって口の中を見あいました。舌ブラシはくすぐったいものだから強くやった方が良く聞きましたが、人の口の中なので、加減が分からず難しいものでした。しかし、その後自分がされる立場になって、初めてそのくすぐったさを経験し、もっとこうすれば良いなど気付くことができたので良い講習になったと思います。

2日目は1日目とは違うグループを作って、実際の現場へ行き学習しました。私はデンタルクリニックツチャに行きました。そこでは医療費の問題、人手不足の問題など様々な話を聞かせていただきました。歯医者について治療する事はあっても歯科医師の方の考えなどを聞くという経験は今までなかったので良い経験になったと思います。難しい内容で、今まで考えた事もないようなこともありましたが、医療職に将来携わるのを目指している身としては、知らないことを知っていく事はとても大切だと気付かされました。クリニックで話を聞いた後はエバーグリーンという施設に行き、訪問診療の見学をさせていただきました。診療所での診療と訪問診療では、治療内容に大きな差があるのかなと思っていましたが、そんな事はなく訪問の場合は移動や準備に時間があって大変ではあるけれども、道具さえあれば出来るし、大きな違いはないと聞いて驚きました。また、訪問先での思いがけない事態に色々考えて治療しなくてはならないこともあり、技量も上がると知って、訪問診療は大切なものなのだということを学びました。

今回、参加してみて連携の大切さを学び、他職種を目指している人々と関わる事は大切だと思い、自分からもっと外へ外へ意欲を持って学んでいかなければならないことに気付かされました。とても良い経験になりました。

新潟大学歯学部口腔生命福祉学科3年 村山 未帆

私は、今回のフィールドワークで津川病院と東蒲の里で見学実習をさせていただきました。

津川病院は阿賀町唯一の病院であり、急性期医療・地域医療・高齢者ケア等、阿賀町の人々の健康や医療のすべてを担っているという病院でした。通院可能な患者さんに対して、津川病院内で行われる集める医療と、バスの本数が少なく、高齢世帯で外出が難しい人などに対して、在宅で行われる訪問診療、訪問介護、集会場を回って診察を行う巡回診療などの出向く医療の両方が行われていました。高齢化が進んでいく中で、この集める医療と出向く医療のバランスが重要になってくると教えて頂きました。また、1人の高齢者の方が様々な疾患や問題を抱えており、それが相互にからみあって口腔内の問題や摂食・嚥下の問題、病気等々が引き起こされているため、様々な職種が連携して1人の高齢者の方をチームで支えるということが必要不可欠になってくると思います。そのような中で津川病院では連携ファイルを用いて、多職種の人が切れ目なく介入し、また、行った処置内容や患者さんの様々を記録することで、多職種間で情報が共有でき、1人の患者さんを多面的にサポートすることができるのだと感じました。また、電子カルテシステムも導入され、訪問先でも病院と同じカルテを見ることができ、同じように医療が提供できるのだと思いました。口腔ケアはお口の中をきれいにするというのが最大の目的ではありますが、それだけではなくお口の中の状態を見ることで全身の体調や健康状態を知ることができたり、コミュニケーションの場になったりと様々な役割や効果があるのだということを感じました。

普段同じ学科の人としかほぼ交わりがなく、医療について話すときも自分の専門分野に対する話や視点が主になってしまうのですが、今回WSとFWに参加して同じ医療系の他学科の方々とお話しをして、それぞれの専門分野からの視点で医療の話をするのができてとてもよい刺激になったし、今後多職種連携をしていく上で、自分の専門領域に対する知識や高い専門性を身に付けることが必要不可欠であるということと同時に、自分の専門分野だけに留まらない幅広い知識や他職種に対する理解がとても重要なのだと思いました。

最後に阿賀町は緑が豊かでとても多くの自然に囲まれた良い地域で、津川病院の看護師さんも優しくとても良い雰囲気様々なプログラムを用意して下さい、とても楽しく多くの事を学び経験し、吸収して行くことができました。本当にありがとうございました。



アンケート



今回のワークショップ・フィールドワークを通して、参加した学生の口腔ケア・多職種連携に対する意識に変化がみられるかどうかを調査することを目的に、ワークショップ・フィールドワークの開始時と終了時に、参加者全員にアンケートを施行しました。

アンケートは、口腔ケア・多職種連携について特化したオリジナルで、口腔ケア・多職種連携に対するイメージ、コミュニケーション、将来の進路などについて、計 19 の質問項目からなります。それぞれ、visual analogue scale (VAS) を用いて回答する形式としました。各項目について、それぞれプレアンケートとポストアンケート間で比較検討しました。統計学的検討には Wilcoxon の符号付順位検定を用い、統計ソフトとしてヒューリンクス社の「SYSTAT 11 Windows 日本語版」を用いました。その他に、プレアンケートでは口腔ケア・多職種連携についての自由意見を記入式で設問し、ポストアンケートでは今回のワークショップ・フィールドワークについての自由意見を記入式で設問しました。

アンケート結果を見ると、

- ・ 口腔ケアについて知っている
- ・ 口腔ケアは重要である
- ・ 口腔ケアにはやりがいがある
- ・ 誤嚥性肺炎を説明できる
- ・ 超高齢社会において誤嚥性肺炎の対策は必要である
- ・ 医療に関わる上で他職種との連携は重要である
- ・ 医療に関わる際、他職種との連携には自信がある
- ・ 「ソーシャルキャピタル」という言葉について説明することができる
- ・ 健康状態には、その人個人の要因だけでなく住んでいる地域の要因が影響する
- ・ 健康状態には、その人の社会的・経済的要因が影響する

以上の項目でワークショップ・フィールドワーク終了後は有意に VAS が高値となっていました。ワークショップ、フィールドワークの経験から、口腔ケア・誤嚥性肺炎・多職種連携・ソーシャルキャピタルについて、その基本的認識・重要性についての理解を深めることができたのではないかと思います。アンケートの結果からも、今回のワークショップ・フィールドワークは、学生が医療職へのモチベーションを上げるよい機会となったのではと考えています。

【アンケート結果】

	質問項目	プレ	ポスト	p 値
1	口腔ケアについて知っている	37.1	75.1	p<0.001
2	口腔ケアは重要である	87.1	94.6	p<0.01
3	口腔ケアは歯科医、歯科衛生士の仕事である	58.8	46.5	n.p.
4	口腔ケアは看護師の仕事である	58.8	48.4	n.p.
5	口腔ケアは言語聴覚士の仕事である	54.8	48.3	n.p.
6	口腔ケアにはやりがいがある	67.9	91.6	p<0.001
7	誤嚥性肺炎を説明できる	48.6	80.7	p<0.01
8	超高齢社会において誤嚥性肺炎の対策は必要である	84.9	93.1	p<0.01
9	医療に関わる上で多職種との連携は重要である	90.1	95.6	p<0.01
10	医療に関わる際、他職種との連携には自信がある	35.6	70.0	p<0.001
11	地域住民と話すことが苦にならない(相手を想定した場合に)	46.8	52.1	n.p.
12	「ソーシャルキャピタル」という言葉について説明することは	16.2	66.4	p<0.001
13	健康状態には、その人個人の要因だけでなく住んでいる地域の要因が影響する	69.9	81.2	p<0.05
14	健康状態には、その人の社会的・経済的要因が影響する	70.8	82.5	p<0.05
15	患者(患者家族を含む) と話すことが苦にならない(相手を想定した場合に)	42.6	45.4	n.p.
16	行政職(福祉課長や保健師など) と話すことが苦にならない(相手を想定した場合に)	41.2	45.4	n.p.
17	病院外での勤務によって、医療人の能力は低下すると思う	21.7	24.2	n.p.
18	将来働きたい場所は : へき地	44.9	55.5	p<0.01
	都市部	52.9	60.1	n.p.
19	将来働きたい医療機関は : 診療所	49.8	54.0	n.p.
	小規模	54.1	55.6	n.p.
	中規模	59.2	62.9	n.p.
	大規模	58.1	61.2	n.p.
	大学病院	55.6	61.2	p<0.05

ご協力いただいた施設

有松歯科医院
医療法人愛広会 豊浦病院
介護老人保健施設エバーグリーン
介護老人保健施設中条愛広苑
柿崎第2デイサービスセンター
グループホームどっこん
デンタルクリニックツチャ
特別養護老人ホーム東蒲の里
特別養護老人ホームよねやまの里
新潟県歯科医師会
新潟県立津川病院

(五十音順)

実習を受け入れていただき誠にありがとうございました。
心より感謝申し上げます。

新潟大学医歯学総合病院 次世代医療人育成センター
〒951-8520 新潟市中央区旭町通 1-754
TEL : 025-227-0885
URL : <http://www.nuh.niigata-u.ac.jp/jisedai/>